

取ルベシ、皮ヲ剥ギ去レバ其樹愈長ズ、其皮外ノ粗皮ヲ去ル時ハ幾重ニモ薄クヘグ、淺褐紅ニシテ白斑アリ、土人採テ色紙短策ニ作リ、或ハ書ノ表紙トナシ、又笠ニ作リ、或ハ物ヲ包裹シ竹籜ニ代ユ、又コノ皮能クモユル者故ニ、雨中ノ炬火ニ作リ、或ハ鷦鷯ヲ使テ魚ヲ捕ル時ノ火把トス、故ニ信州ニテウダイマツト云、皮ニ脂多キ故、水中ニ入リテモ火滅セズ、又甲州德本ノ無盡藏ニ樺皮ヲ多ク用ユ、故ニ今世ニ用ユル者多シ、此ヲ燒バ臭氣アリ、故ニクサ・クラト呼ブ無盡藏ニ樺ヲ隱シテ華ニ作ル、通雅ニモ樺ヲ華ニ作リ、又樺ニ作ルコトヲ云ヘリ、カバノ品類多シ、今茲ニ略ス、

〔草木育種後編下品〕藥本 樺
俗にシラカバといふ、深山に生ず、和蘭ベルケンボームといふ、前編已に其有用の事をいふ、皮は松明となすべし、放翁の雨中の詩に、樺炬如椽點不明といふ、われ中士にても炬となす、雨中にもよく燃る事知るべし、又春月芽を生ずるの比、木に穴を明ケ、竹の管をさし、これに壇を付て置ば、自然と津液を滲溜て、壇中にたまるものを藥用とすべし、内服して小便を利し、血中の汚液を除て、木材葉皮皆水に煎じ服すれば、汚血を驅る事液と効同じ、或は葉を炒未となし、水を加へて灰汁とし、頗頗に瘤れは毬を生ず、又柵さかは血止の藥とすべし、痔血などに外敷てよし、山の黒き地にて、外の草木の生せざる處にても生長す、故に山野ともに植てよし、山中にて實生をとり、其年の秋に分け植べし、根へ木の葉馬屎等を入れてよし、

〔古事記傳八〕召天兒屋命布刀玉命布刀二字以下音、下效此而、○中取天香山之天波波迦此三字以音、木名而、令占合麻迦那波而自麻以下音

〔古事記傳八〕波々迦、今本はみな婆々迦と作れども、言の首を濁る例なれば、必波字なるべし、故今は舊事紀に波々と作るに從つ、此餘の書の書どもには、多く波と婆とは、互に寫し誤れる所多し、後世平假字し、和名抄に、朱櫻波々加、一云邇波佐久良、又木具部に、樺木皮名可以爲炬者也、和名加波、又云加